



Title	ロシア語の受け身が描く世界 : 再帰動詞による受動態とは
Author(s)	林田, 理恵
Citation	言語文化研究. 2013, 39, p. 75-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロシア語の受け身が描く世界

— 再帰動詞による受動とは —

林 田 理 恵

Мир сквозь призму пассивных конструкций

— Пассивные конструкции с возвратными глаголами в русском языке —

ХАЯСИДА Риэ

Цель настоящей статьи — рассмотреть и проанализировать разноуровневые (лексические, синтаксические и семантические — в том числе в связи с грамматической семантикой как аспектуальностью и модальностью) признаки, характеризующие место и функции пассивных конструкций, формируемых возвратными глаголами, в системе современного русского языка. В работе исследовано количественное и качественное соотношение пассивных конструкций с возвратными глаголами и активных конструкций с неопределенно-личным значением, представлены разнообразные аспектуальные, модальные, и дискурсные функции обеих конструкций в текстах различной организации.

キーワード：ロシア語受動構文，再帰動詞，不定人称文

1. はじめに

ロシア語の受動構文は動詞アスペクトによって2種類の表現形式をもつ。完了体動詞は受動過去分詞を形成し、「コピュラ+分詞」形（以下，分詞形）によって，不完了体動詞の場合は再帰動詞によって（以下，再帰形）受動が表現される。

分詞形と再帰代名詞や接辞等を用いる形式の2タイプによって，元の他動詞とはヴォイス的に異なる内容が表現されるという事情は，フランス語やドイツ語をはじめとして多くの言語で観察されることは言うまでもない。

ただ，動詞のアスペクト・カテゴリーが未分化なフランス語やドイツ語などと，アスペクトが文法化しているロシア語では，これら2形式のヴォイス的側面におけるふるまいには当然，異なりが見られる。フランス語やドイツ語では，ロシア語の不完了体に相当するような継続状態や非限界動作を表す動詞からも過去分詞は問題なく形成される。一方，ロシア語では不完了体動詞に相関する受動分詞は歴史的に次第に生産性を失い，受動過去分詞は現代語では一

部の例外を除き、もっぱら完了体動詞とのみ相関する（Ломтев 1956:177, 181, 195-196; Данков 1981:20-21; Кузьмина, Немченко 1982:369-371; 林田 2000:18-20; 林田 2005:181-184）。つまり、継続状態や習慣・反復動作、さらには非限界動作などのアスペクト意味が表現される場合、フランス語やドイツ語では原則的には2形式のいずれもがそのヴォイス変換機能を担っているのに対し、ロシア語では再帰形のみがその表現にあずかるということになるのである。

こうした事情はとりもなおさず、各言語における再帰形構文の機能的差異として現出する。詳しくは触れないが、たとえばフランス語の代名動詞による受動用法では、時間軸上の特定動作を表すことができない、動作主表示を許容せず、想定される潜在的動作主は不特定の間人である、主語は3人称の事物に限定される、多くの場合、習慣性や可能性、規範性などのモダリティーが表現される、といった特徴が指摘されている（Wagner & Pichon 1962:293; 春木 1993:214-215; 山田 1997:100-103）。

それでは、不完了体が相関する意味領域での受動表現として、ある意味、限定された形式として登場するロシア語の再帰形受動文の場合、他言語に比較してどのような特徴が見出されるのであろうか。また、ロシア語自体の言語システム上、他形式といかなる相関関係にあり、機能的役割をどのように分担しているのか。そこでは機能的に重なる特性をもつと予想される不完了体他動詞不定人称文との関係も、無視できない重要なファクターとして考察対象に浮上してくるのである。

本稿では、すでに拙著も含め先行研究で述べられてきたロシア語再帰形受動文の特徴を2節でまとめ、残されている課題を明らかにする。3節ではロシア語中・長編7作品のコンコーダンスを作成し、これまでの研究では言及されることのなかった不完了体他動詞不定人称文¹⁾との相関性を考察する目的で、それら作品中の再帰形受動文と不定人称文データの抽出結果を明らかにする。それらのデータを使用し、4節で、まず 1) 動詞語彙情報 2) 受動文主語と不定人称文における動作対象を表す名詞句の形態・意味情報をまとめ、それらの情報を基礎に、本稿では特に 3) アスペクト、モダリティー等を含む構文レベルの意味・機能特徴を中心に両構文の分析を行い、それぞれが担う機能特性を明らかにしていく。最後に、5節でテキスト構造上の機能における分析等、今後の課題についてふれる。

2. ロシア語再帰形受動文の特徴

2.1 再帰形受動文の成立過程

ロシア語再帰動詞が歴史的にどのように形成され、そしてそれがメタファー的拡張によっていかに意味を変遷させてきたかについては、すでにДанков (1981) や Крысько (1997) が明らかにしている（Данков 1981:59-94; Крысько 1997:375-382）。

スラヴ祖語ではギリシャ語、ラテン語がもっていた中動相を表す特別な人称語尾はすでに形態的に失われているが、主体内にとどまる動作指標としての中動相－求心相の機能的意義は、

スラヴ祖語、古代ロシア語の系譜では再帰代名詞がそれを引き継いでいる。この再帰代名詞が動詞に後置する接辞 *-ся* に変わり、現代ロシア語の再帰動詞 (*возвратные глаголы*) となるが、純粹再帰 (自身への動作)、相互再帰 (複数主体間にとどまる動作)、一般再帰 (主体内にとどまり、他へ波及しない自律的動作・変化) といったそのメタファー的意味拡張の根底には、共通して中動的意義の存在が確認される。

Данков (1981) では、古代ロシア語文献上の *-ся* 形動詞のうち、受動用法として使われているものは全体の 7-9% にすぎないとされる (Данков 1981:86-87)。そこでは受動用法の解釈が成立する特殊な統語環境の存在が指摘されているが、そのことは、再帰動詞による受動用法が中動的意義の個別・特殊な変異として存在することを物語っている。

また、Крысько (1997) も 12~13 世紀の古代ロシア語における大多数の他動詞は、受動用法としての *-ся* 形をもたなかったと指摘しているが、現代ロシア語でも *-ся* 形をもたない他動詞や、受動用法の意味拡張が認められない他動詞派生再帰動詞が存在し、ヴォイス・カテゴリーの文法手段としては極めて不安定なものとなっている。

2.2 現代ロシア語再帰形受動文の特徴

現代ロシア語再帰形受動文の構文的、意味・機能的特徴については、すでに林田 (1999, 2000, 2005) での考察によって以下の点を浮き彫りにした。

(1) 1・2 人称代名詞が主語となる頻度は極めて低い。

(2) 典型的には 3 人称の事物主語が現れる確率が高いが、有情名詞主語が完全に排除されるわけではない。

(3) 習慣的事実、事物の恒常的状态、属性表示の意味が一般的であり、不完了体動詞の基本的なアスペクト意味である特定時点における現実的持続相は観察されない。

(4) 動作主表示は稀にしか観察されない。

(1), (2) は、ロシア語再帰形受動文の成立条件に、主語の位置にある事物の完全な脱動作主性という事実が関与していることを物語っている。つまり、再帰構文において事象生起の中心軸たる 1・2 人称主語が選択されると、それは優先的に動作主の読みをもたらし、その結果、文全体の意味として一般再帰、相互再帰等、受動以外の解釈が前面に出るという事情である。

有情名詞主語についても同様のフィルターがかかりやすいのであるが、フランス語の場合と異なりロシア語では完全に排除されているわけではない。ここに個別言語としてのロシア語再帰形受動文の重要な特徴を見ることができる。

(3), (4) は、ロシア語再帰形受動文が中動的意義の歴史的継承の枠内 (主体を越えての動作・作用の展開とは異なる事態の言語化) にあることを示している。

求心相の最も典型的な意味である「自律的、内発的な運動・変化」は、そのアナロジーとして、自身では運動、変化する能力をもたない非情物や抽象概念、出来事の変化の意味を取り込んで

いく。そこでは、実際に存在するはずの外在的な力、動作主は観念されず、運動・変化それ自体が、あたかも自律的に生起するかのような事態としてとらえられる。そして、その延長線上で動作主の存在が暗示される個別的なケースが発生し、受動用法へとシフトする可能性を開く。

ただ、受動へとシフトした場合でも、そこでフォーカスされているのは「主語」たる人・事物に対する外在的な具体的エネルギーの流れではなく、エネルギーを被る人・事物自体の変化である。そして、その変化は反復性というフィルターを通すことによって、外在的な力の存在はさらに希薄化され、「主語」の習慣的、一般的状態、恒常的属性の表現という中動的意義の延長線上の意味が現出することになるのである。

反復される出来事、習慣的事実の描写であれば、動作主が不特定となる確率は高くなるが、ここでもフランス語とロシア語の異同点が浮上する。4節以降で具体的なケースを見るが、ロシア語再帰形受動文では、頻度は低いとは言え、ある特定期間における特定動作主が想定される反復的出来事の描写が許容される。そこから、特定動作主が表現形式上も具体的な形をとって現れる可能性が開かれてくるのである。

とりあえず以上の事実からは、先に触れたフランス語代名動詞・受動用法と比較した場合、中動→受動という意味拡張プロセス上で、ロシア語再帰形受動文の方がより受動化にシフトした位置にあるとの印象を受ける。おそらくそこには、フランス語では代名動詞受動用法と分詞形受動文が競合するという事実が関与している可能性が高い。ロシア語ではすでに述べたように、不完了体の意味領域において、一部の例外を除き分詞形受動文が再帰形と競合することはなく、言語システム上の機能分担という観点からも、意味拡張への制限はフランス語ほどにはかからないと言えるようである。

2.3 先行研究が残した課題

従来、客体の主題化、動作主の非焦点化等、機能上の重なりを見せると考えられてきた受動文と他動詞不定人称文。ロシア語ではまさにこの2形式の並存状態が観察されることで、この2構文の差異化原理が以前より問題となってきた。

ロシア語分詞形受動文については、林田(2001)、(2005)におけるアスペクト的観点からの分析によって、それらが状態パーフェクトから動作パーフェクトというパーフェクト機能グラデーションを示すことを明らかにした。特に、能動他動詞を使用した完了体不定人称他動詞文との比較では、分詞形受動文におけるパーフェクト機能の圧倒的優位性が観察され、分詞形受動文が能動文とは本質的に異なる事態を描く表現形式である点を強調した。

また、一部、観察されるアオリスト動作受動文とOVS語順の他動詞能動文²⁾の2構文における文形成動機の差異を林田(2011)で以下のようにまとめた。

(5) アオリスト受動文は、客体がマクロな物語展開において視点中心軸、拠点となる中心人物である場合に、主語化操作でその中心軸の一貫性を保つ機能をもつ。

(6) OVS 語順他動詞能動文における i) 有標語順文は動作主の焦点化とそれによる新しい事態、人物のテキストへの導入効果をもたらす。事象伝達文は VS 無標語順で事物・人物の存在、出現を表示し、そのことで同じくそれら事物・人物のテキスト導入効果をもたらす。ii) 文頭位置の直接目的語はマイクロな前後の文脈での結束性を保つ役割を果たす。

このように分詞形受動文については、不定人称文や OVS 語順他動詞能動文との機能上の差異を明らかにしてきたわけであるが、再帰形受動文に関しては、2 節で述べたような分析の段階にとどまっており、不完了体動詞を用いた不定人称文や倒置文との差異化原理が必ずしも明らかになっているわけではない。

特に、4 節以降でも示すように、不定人称文で習慣的事実が描かれる文が少なからず存在するという事実がある以上、そのようなアスペクト意味だけではこれら 2 構文の言語システム上の共存を説明するファクターとしては弱いと言わざるを得ない。

フランス語代名動詞受動用法の先に見たような制約が、分詞形受動文との競合によってもたらされているとすれば、不完了体の意味領域で分詞形受動文との競合が存在しないロシア語再帰形受動文の場合、この構文のもつ制約の原因を別のところに求めなければならない。それがまさに不定人称文及び倒置文との競合という事実であり、その競合関係における差異化原理が明らかにされない限り、それらの構文の機能的本質は見えてこないのであり、本稿の目的も、これらの構文を多面的に分析・考察することで、それらの機能上の特性、差異を探るという点にある。

3. ロシア語中・長編作品中に観察される再帰形受動文、不定人称文データ

3.1 再帰形受動文データ抽出

表 1 は今回、分析対象とした現代ロシア語中・長編 7 作品のリストである。

表 1 分析対象作品における各ワード数

作品名	ワード数
Джамия (Ч.Айтматов)	15,208
Белое облако Чингисхана (Ч.Айтматов)	25,989
Деньги для Марии (В.Распутин)	30,486
Похождения Шипова, или Старинный водевиль (Б.Окуджава)	58,662
Убийца Поневоле (А.Маринина)	61,595
Белая гвардия (М.Булгаков)	73,799
Кафедра (И.Грекова)	75,949

これらの作品中より、まず不完了体再帰動詞を使用した文を抽出・分析し、第 1 段階としてデータ中、明確に中動用法であることを示す文を除外した。

ロシア語再帰動詞の純再帰から受動にいたる歴史的メタファー拡張ということをすでにみた
が、中動から受動へのシフトにおいて、それらを区分するはっきりとした線引きの条件は出し

にくい。これまでも指摘されてきたように、再帰動詞の受動としての意味は「可変的な語彙・形態・統語手段の組み合わせ」(Данков 1981:86-87)によって支えられており、それぞれの文における統語環境及び文脈に左右されるということになる(Храковский 1991:149)。

ただ、中動と受動の明確な境界線が引きにくいという状況においても、受動用法の必要条件として主語の脱動作主性(主語以外の潜在的動作主の存在)を挙げることができる。すなわち、主語名詞句が示す人・事物の動作・変化・状態に、主語以外のいかなる外圧も直接的には関与していない場合、それらの文は中動用法を示すものとしてデータの対象からはずれる。逆に、構文内に動作主項を示す造格成分が存在する場合は、受動用法としての読みが確実なものとなる。

表2にこのような最初の条件による対象データの分類結果を示した。

表2 不完了体再帰動詞, 他動詞不定人称文対象データ

作品名*	不完了体再帰動詞	+主語以外の(潜在的)動作主	+動作主項	不完了体他動詞不定人称文
Джамиля	380	5	0	12
Белое облако	537	29	4	19
Деньги для Марии	596	12	0	75
Похождения Шипова	1125	27	2	65
Убийца Поневолё	945	32	3	49
Белая гвардия	1019	27	1	72
Кафедра	1543	128	8	128
計	6145	260	18	420

* 作品名は表1の順番で省略形にて表示。以下の表、例文でも同様。

表2からも明らかなように、全データ中の不完了体再帰動詞構文6145例のうち、主語以外の(潜在的)動作主が考えられるケース、すなわち受動用法の読みの可能性をもつものは260例、4.2%にすぎない。これは先のДанков(1981)が指摘した古代ロシア語文献上の受動用法の割合をさらに下回るものであり、現代ロシア語においても依然として再帰動詞による受動用法の使用頻度がきわめて低いことを示している。さらに、それら260例で造格成分による動作主項をもつものはわずか18例しかない。言い換えると、この段階で確実に受動として認められるものはこの18例だけだということになる。

言語外事実として主語以外の潜在的動作主が存在する場合でも、話者によるその事態認識は一樣ではない。したがって、動作主項をもたない残り242例について、受動/非受動を判断するためには、さらに詳細な各文における語彙・形態・構文情報の分析が必要となる。

たとえば「花火を上げる」→「花火が上がる」、「茶碗を割る」→「茶碗が割れる」のように、本来、自律的運動が考えられないような非情物であっても、あたかも自ら変化、運動するかのようメタファー表現が成立する。その場合、先にも述べたように、存在するはずの外在的動

作主は話者のイメージからはずれ、非情物そのものの変化が自律的に生起する事態として描かれる。さらに「授業を始める」→「授業が始まる」、「修正動議を出す」→「修正動議が出る」のような、事態構成にもともと有情物が関与するような場合には、他動→自動の変換は一層、頻繁に起こる。

- (7) ... Голос диктора, объявляющего о прибытии и отправлении поездов, рвется на части, комкается, и его невозможно разобрать. «Деньги для Марии» (列車の発着を知らせるアナウンスの声は、途切れがちで、せかせかと早口で、聞き取れなかった。)
- (8) ... На черном бархате возвышался посеребренный гроб, и белые цветы неведомых названий густо покрывали его и рассыпались по всему бархату, словно росли из него. «Похождения Шипова» (黒いビロードの上に銀箔で飾られた棺がそびえ、名前もわからない白い花がその棺をびしりと覆い、ビロードの至るところにもこぼれ散っていて、まるでそこから生えているかのようだった。)
- (9) В коридоре послышались шаги командора. Оказалось — не командора, а коменданта. — Граждане, прошу очистить помещение, — сказал он гранитным басом. — Здание закрывается. «Кафедра» (廊下にコマンドールの足音が聞こえてきた。コマンドールと思いきや、^{コメンダント}校舎管理人だった。「みなさん、お引き取りください — 彼はがんこそうなパスで言った — 閉館です」)

(7) - (9) は対象データ中で観察された例であるが、主語名詞句の状態・変化は、言語外事実としてはいずれも外在的動作主の働きかけによって引き起こされている。また、語彙としての *рваться*, *рассыпаться*, *закрывается* は受動/非受動どちらの読みも可能である。しかしながら、たとえば (7) の *рвется* で描かれているのは、「途切れがち」であるという声の状態そのものであり、話者の表現意図に本来の動作主であるアナウンサーの「途切れさせる」という他動動作のイメージは存在しない。(8) でも同様に、実際には花が勝手に棺を覆ったり、ビロードの上に散らばったりするわけではないのだが、あたかも花の自律的な動きであるかのように、潜在的な動作主を一切、視野に入れることなく事態が描かれている。主語である *белые цветы* (白い花) は、*рассыпались* の前後に他動詞 *покрывали* (覆っていた)、自動詞 *росли* (生えていた) を述語として従え、そのことからこの名詞句が文全体を通じて自律的運動の主体として位置づけられていることがわかる。

(9) の *закрывается* の用法はやや特殊であるが、やはり明確に非受動の意味が表現されている。ここでも実際に校舎を閉めるのは話者である管理人その人なのだが、「閉めます」や「閉められます」ではなく、敢えて「閉まります」「閉館です」と表現することで、事態は人の動作が介在できない、変更できない規定事項であると知らしめる効果をもたらしている。

先に抽出した(潜在的)動作主が想定できる 260 の再帰動詞文のうち、前後の文脈等の分析により (7) - (9) と同じように明確な非受動を示すと判断されたものは 22 例を数える。した

がって、残りの 238 例が次節以降で分析対象となる再帰形受動文³⁾ということになる。

3.2 不定人称文データ抽出

現代ロシア語で伝統的に不定人称文として分類される文は、構文内に主語名詞句をもたず、述語動詞は現在、未来形で 3 人称複数、過去形で複数の形態をとる。表現形式上、顕在化しない主語について + human という条件がある一方、単数/複数、定/不定という点での限定はなく、極端な例では (10) のように話者自身が想定される場合もある。

- (10) — Стой! — закричал Шипов. — Стой, тебе говорят! Кобылка уперлась в снег. Шипов вывалился из дровней. Гирос за ним. «Похождения Шипова» (「止まれ!」シーボフは叫んだ。「止まれって言ってんだ!」馬が雪の中に足を踏んばった。シーボフは荷櫓から転げ出た。ギーロスが後に続いた。)

主語を顕在化しない動機として、主語が特定できない、主語を明示化する必要がない、敢えて主語を明示化することを避けるといった点が主要なものとして指摘される (Современный русский язык 2006:133)。この点で、前後の文脈から主語を特定・復元できる省略文とははっきりと区別される。省略文には、前後の文脈で特定され、明示的にも表現されている主語について、冗長さを嫌ってくり返しを避け、省略するという全く別の動機がある。

また、次節でも詳しく触れるが、定/不定の区別はないとは言え、不定人称文で想定される主語は多くの場合「実在する人間」であり、同じ非人称文でありながら、超時間的・普遍的事実を中心に表現する普遍人称文⁴⁾ともその点で異なりを見せる。不定人称文での「不特定性」とは、ある特定の時空間内で実際に起こっている事柄を前提とする不特定性である場合が多い。したがって、不定人称文では「その当時は」「うちの大学では」といった時・場所を限定する状況語や、特定事物・人物を指す定名詞句による補語などがしばしば文頭位置に配され、想定される主語の範囲を限定する。

以上の点に留意しながら分析対象 7 作品中の不定人称文を抽出し、総数 420 例のデータを得た。作品ごとの内訳は表 2 の通り。

次節以降、上記の不定人称文 420 例と、先に抽出した 238 例の再帰形受動文を分析対象データとして、1) 動詞語彙情報 2) 受動文・主語/不定人称文・動作対象名詞句の形態・意味情報について検討し、さらに 3) アスペクト、モダリティー等を含む構文レベルの意味・機能特徴について詳細な考察を行っていく。

4. 再帰形受動文と不定人称文の差異化原理

4.1 動詞語彙情報

まず、238 例の再帰形受動文に使われている再帰動詞の異なり数は 153、そのうち現代ロシア語では受動用法しかもたない⁵⁾とされる動詞が延べ語数 83、異なり動詞数 54 に上る。現実の使用では辞書等の情報からのゆれ、ずれが当然起こってきていると思われるが、次の (11)

はそのようなずれを利用することでメタファー効果をねらった例である。

- (11) Тут он понял, что отчасти томило — внезапное молчание пушек. Две последних недели непрерывно они гудели вокруг, а теперь в небе наступила тишина. Но зато в городе, и именно там, внизу, на Крещатике, ясно пересыпалась пачками стрельба. «Белая гвардия» (そのときトウルビンは大砲が不意に沈黙したのがいささか気になった。この二週間、周りではひっきりなしに砲撃の音がしていたのに、今、空には静けさが訪れたのだ。そのかわり市街、つまり下手のクレシチャチクで一斉射撃のバラバラという銃撃音がはっきりと聞こえてきた。)

пересыпалась は受動用法しかもたない再帰動詞であり、пересыпалась пачками стрельба を直訳すれば「銃撃音が一斉にばらまかれていた」となる。本来なら доносилась стрельба (銃撃音が聞こえてきた) という表現を使うべきところを、敢えて受動構文を用いることで容赦のない攻撃の人為性が強調されている。

一方、不定人称文 420 例での異なり動詞数は 191 であるが、そこには велеть, ждать, просить, советовать 等、対応の再帰形が存在しない動詞が 19 (延べ語数 53) 含まれる。また、звать, знать, любить, обещать, терпеть, хотеть 等、再帰形は存在するものの受動用法のない動詞も 17 (延べ語数 87) に上る。これらの動詞が使用されている 140 例の不定人称文は再帰形受動文に置き換えることがそもそもできない。したがって、両構文の差異化原理を探るという考察の対象からは除外されることになり、対象データはこの段階で前節で抽出した 420 例からこの 140 例を除いた 280 例となる。

逆に不定人称文データで使われている他動詞の再帰形が再帰形受動文データにも存在するのは以下の 27 動詞であり、これらの動詞が使用される例文では、これ以降の分析で 2 構文の明確な差異化原理が求められることとなる。

вести-вестись, выводить-выводиться, выносить-выноситься, говорить-говориться,
готовить-готовиться, забывать-забываться, зажигать-зажигаться, закрывать-закрываться,
запирать-запираться, открывать-открываться, оценивать-оцениваться, петь-петься,
передавать-передаваться, повторять-повторяться, подавать-подаваться, прерывать-прерываться,
принимать-приниматься, проверять-проверяться, проводить-проводиться, пускать-пускаться,
решать-решаться, сдавать-сдаваться, снимать-сниматься, ставить-ставиться, считать-считаться,
требовать-требоваться, украшать-украшаться

4.2 再帰形受動文・主語／不定人称文・動作対象名詞句の形態・意味情報

再帰形受動文における動作主情報については、林田 (1999, 2000, 2005) で詳しく考察しているので、本稿では再帰形受動文における主語の形態・意味情報、不定人称文における動作対象名詞句の形態・意味情報を検討する。表 3 に各構文対象データ中の主語及び動作対象名詞句の

形態・意味情報を示している。

ところで、不定人称文の動詞が節、不定詞、o+前置格や否定生格形の名詞句を従える場合も、同じ成分を主語に準ずるステータスとしてとる無人称受動文に原則、変換が可能である。したがって、それらの情報についても差異化原理の考察対象となるので、合わせて表中に示している。無人称受動文はデータ中 8 例が観察される。

さらに、不定人称文では 32 例の動作対象が省略されるケースが存在し、文脈から特定できる場合はそれぞれの情報によってリストに含めている。ただし、以下の (12) のように、動作対象がある範囲までしか限定できない場合も観察され、そのような場合には形態情報に関して不特定という項目で処理している。

- (12) Учиться ей сначала было трудно. Математической подготовки, полученной в школе, явно тут не хватало. Трудна была и лекционная система. В школе все было ясно: изложение — повторение — закрепление. Здесь не повторяли и не закрепляли, только излагали. «Кафедра» (勉強は初めは難しかった。学校で受けた数学の訓練は、ここでは明らかに不十分であることが分かった。講義システムというのも大変だった。学校では万事はつきりしていた、説明——反復——確認である。ここでは反復も確認もなし、ただ説明するだけである。)

表 3 再帰形受動文・主語／不定人称文・動作対象名詞句の形態・意味情報

	再帰形受動文 主語		不定人称文 動作対象名詞句等	
	-human	+human	-human	+human
1 sg		1		12
1 pl				8
2 sg				6
3 sg	119	11	82	53
3 pl	86	9	55	19
節	6		33	
不定詞	6		7	
不特定			5	
計	217	21	182	98

まず、表 3 から読み取ることができる顕著な傾向は、-human / +human の指標に関して両構文で大きな隔たりがあるという点である。再帰形受動文では +human の指標をもつ主語名詞句は全体の 1 割に満たない。一方、不定人称文の動作対象の場合には、その数は全体の 3 分の 1 を超える。

再帰動詞による受動用法が中動的意義の個別・特殊な変異として存在し、主語名詞句の完全な脱動作主性とその成立の条件として求められる再帰形受動文と、そのような条件のない不定

人称文。この差が、有情名詞句の頻度差となって立ち現われる。

- (13) Дело в том, что сравнительно недавно, около полугода тому назад, в Алма-Ате состоялся закрытый процесс: военный трибунал судил группу казахских буржуазных националистов. Эти враги трудового народа искоренялись беспощадно и навсегда. «Белое облако» (というのは、比較的最近、およそ半年ほど前のことであるが、アルマアタで非公開裁判が開かれ、軍法会議がカザフ人のブルジョア民族主義者のグループを裁いた。これらの勤労人民の敵は仮借なきまでに完全に一掃された。)
- (14) ... Двоечники и дипломники больше на кафедру не допускались; их тоже принимали в коридоре на случайных скамейках, выкинутых из аудиторий за негодностью. «Кафедра» (二点の落第点の学生や卒業予定者ももう学科教員室に入れてもらえず、 たまたま使えなくなって教室から廊下に放り出されたベンチで面接を受けた。)
- (15) ... Дарья Степановна обращалась с родным языком царски свободно, на мелочи не разменивалась. Собеседник — не дурак же он! — сам должен был понимать, о чем речь. В эту априорную осведомленность каждого о ходе ее мыслей она верила свято, обижалась, когда ее не понимали, считала за насмешку. «Кафедра» (ダーリヤ・ステパーノヴナは母国語を皇帝のように自在に取り扱って、細かいことに気を使わなかった。話し相手はばかじゃない、彼なんだから！何の話かは自分で分かるべきだ。誰もが彼女の思考の過程を先験的に知っているはずと神がかりなまでに信じているので、彼女は自分が理解されないと、ばかにされたと思って腹を立てた。)
- (16) Слушатели обожали Михаила Семеныча за то же, за что его обожали в клубе «Прах», — за исключительное красноречие. «Белая гвардия» (聴いていた者たちは、彼がクラブ『なきがら』ですぐれた能弁ゆえに尊敬されているというのとまったく同じ理由で彼を尊敬していた。)

(13), (14) で使われている再帰動詞の元の他動詞 искоренять (一掃する), допускать (入らせる) と (15), (16) での понимать (理解する), обожать (崇拜する) の他動性という点に注目してみよう。再帰形受動文は、対象への物理的変化を意味する他動性の高い動詞からの変換であるのに対し、不定人称文では、他動詞とは言え、実質的には対象への変化が何ら含意されない動詞が使われている。

本来、意志をもち自律的運動・変化の主体たる有情名詞句が、再帰構文で「完全な脱動作主性」を得るには、主語名詞句である人物への作用が明示的、外在的である必要がある。そのことが物理的作用を意味する他動性の高い動詞からの変換という条件を生み出し、主語としての有情名詞句の出現頻度に大きく影響してくるのである。動詞それ自体の情報では中動か受動かを決定できない再帰構文における、逃れがたい制約がここにある。他方、そのような制約をもたない不定人称文では、先の2動詞のように他動性の低い動詞からも自由に構文が作られる。物理

的变化のみならず、話者や主体の立場からの事態による心理的影響までも、その表現世界のテリトリーに含める日本語などの受動文との共通性は、ロシア語ではこの不定人称文の領域でのみ観察されるのである。

林田 (1999, 2000, 2005) では、1・2 人称代名詞を主語とする再帰形受動文のデータは存在しなかったが、今回の分析では以下のように、1 例の単数・1 人称を主語とする例が確認された。

- (17) ... Мои сестры Надя и Люба тоже должны были штопать чулки, это умение входило в программу воспитания девочек. У них были специальные грибочки -- красный у Нади, синий у Любы. Я, как мальчик, к штопке чулок не привлекался. Я охотно бы штопал, но, боясь уронить свое мужское достоинство, наблюдал их работу со стороны. «Кафедра» (わしの姉のナージャもリューバもやはり靴下をかがらなければならなかった。それができようになることは、女の子たちの教育プログラムに入っていたのだ。彼女たちには特別のキノコ頭の修理棒があり、ナージャのは赤色、リューバのは青色だった。わしは男の子だったので、靴下かがりの作業をさせられることはなかった。喜んでかかったんだろうが、男の権威の失墜することを恐れて、彼女らの仕事は脇から眺めていた。)

この例のように、再帰動詞 привлекаться (参加させる) が語彙として受動の意味のみをもち、文脈からも主語の意志とはかかわりのない外在的働きかけが明確に読み取れる場合にのみ、1・2 人称主語の再帰形受動文が可能となるようである。1・2 人称代名詞への制約には先に見た有情名詞句の場合と同様の事情がその背景にある。さらに、話し手と聞き手という発話世界の中心軸たる 1・2 人称代名詞が、主語として文の左端位置を占めるとき、人間の最も自然な認知プロセスではそれらが事象生起の契機、動作主として理解されるという事情がその制約にさらに拍車をかけるのであろう。

4.3 構文レベルの意味・機能情報

従来、再帰形受動文は習慣的事実、事物の恒常的状态、属性表示をその主要な意味とするという点が指摘されてきたが、今回の対象データ、238 例の再帰構文では、習慣的事実、恒常的状态、属性表示のアスペクト意味をもつものは 138 例であった。

- (18) ... Мы обгоняли Данияра, оставляя его в густых облаках долго не оседающей пыли. Хотя это делалось в шутку, но не каждый бы стал такое терпеть. «Джамиля» (ぼくたちはダニヤールを追いぬき、彼をいつまでもおさまらない、もうもうとした土煙の中に残して置く。これはふざけ半分で行われたことだけれど、だれもが我慢できるものではなかっただろう。)
- (19) Дом Графа Толстого охраняется в ночное время значительным караулом, а из кабинета и канцелярии устроены потайные двери и лестницы. «Похождения Шипова» (トルストイ伯爵邸は夜間かなり厳重な警備に守られており、また書斎および事務室からは秘密の扉

と階段が設けられている。)

(20) ... Когда сила силу ломит, удивительное становится ничтожным, а прекрасное — жалким.

Отсюда устоялся вывод: все, что попирается, то ничтожно, а все, что простирается ниц, — заслуживает снисхождения в меру прихоти снисходящего. И на том мир стоит ... «Белое облако» (力と力とがぶつかりあうときは異常なものが日常となり、美しきものがみすぼらしくなります。そこから生まれる結論は、踏みにじられるものはすべて取るに足りないものであり、足下にひれ伏すものは慈悲に値する、ただしその慈悲の程度はそれを垂れる者の気まぐれによる、それが人の世というものである、ということです。)

(18) では「僕たちとダニヤール」の日々のたわむれの性格づけが、(19) では「トルストイ伯爵邸」の恒常的な状態が描かれている。また (20) では、時の権力者にとっての普遍的真理ともいべき事柄が語られる中、「踏みにじられるべき運命」という、いわば属性を背負っている者についての言及がなされている。

一方、不定人称文でも、先の抽出データ 280 例中、149 例が習慣的事実・反復出来事のアスペクト意味を示す。

(21) ... И работала Джамиля напористо, с мужской хваткой. С соседками ладить умела, но если ее понапрасну задевали, никому не уступала в ругани, и бывали случаи, что и за волосы кое-кого таскала. «Джамиля» (ジャミリヤーは働く時も、男のようにねばり強かった。隣近所のおかみさんたちとは仲良くしていたが、彼女をいたずらに怒らせたりすると、彼女はだれにも負けてはいなかった。相手の髪の毛をつかんで、ひきずるようなこともあった。)

(22) — Как посуду пакууют, знаете? Тарелка — стружка, тарелка — стружка... Так вот, в диссертации все тарелки Володиной, а вся стружка Яковкина. «Кафедра» (「食器をどのように梱包するか、ご存知でしょう? 皿 — かなな屑, 皿 — かなな屑ってやりますね..... その通り、論文の中味は皿は全部ヴォロージャのもので、かなな屑は全部ヤコフキンのものです」)

(23) Потом он лег, и ему повезло, он уснул. Ему приснился интересный сон: будто он едет в той самой машине, которая его разбудила, и собирает для Марии деньги. Машина сама знает, где они есть, и останавливается, а он только стучит в окно и просит, чтобы ему их вынесли. Деньги выносят, и машина идет дальше. «Деньги для Марии» (やがて、クジマは横になった。いい塩梅に眠ることができた。彼は、おもしろい夢を見た。自分はどうか、さっき自分を起こした車に乗って、マリヤのために金を集めているらしい。車は、どこの家に金があるのかちゃんと知っていて、そこに止まる。自分はただ窓を叩いて、金をもって来てくれるように頼むだけなのだ。金も持って来られると、車は先へ進む。)

(21) は習慣的事実、(22) も習慣的事実であるが、時空間を限定しないより普遍性をもった

事柄の表現となっている。(23)は反復の出来事を表している。いずれも習慣性、反復性というアスペクト意味の観点からすると、(18)–(20)の再帰形受動文と差異がないように思える。ただ、(21)の *понапрасну* (いたずらに)、(22)の *как* (どのように) という動作様態副詞句の存在、(23)における *стучит* (叩く) → *просит* (頼む) → *выносят* (もって来られる) → *идет* (進む) という動作の順次的展開に注目すれば、そこでは動作性そのものがフォーカスされていることがわかるだろう。再帰形受動文で表現されている主語名詞句の性格づけ、恒常的状态、属性表現という意味とは明確なコントラストをなしている。また、不定人称文32例で動作対象が省略されているとしたが、(12)でもわかるように、これらの文では動作対象の省略の事実そのものが動作性のフォーカスにつながっているのである。

これまでの研究で、習慣性、反復性に準ずるアスペクト性によって再帰形受動文でも観察されるとされた長期継続相については、再帰形受動文データで21例、不定人称文データでも6例が観察された。

- (24) ... Начиная с 1985 года он ждал разрешения на выезд, но КГБ очень не хотел его выпускать. Тянули, сколько могли, но в прошлом году все-таки дали ему разрешение. «Убийца Поневоле» (1985年に彼は出国申請をしました。KGBは彼の出国を望まなかったため、出国許可をできる限り引き延ばしていましたが、昨年ついに許可を出さざるを得ませんでした。)

- (25) ... Иван спал вальяжно, в моей пижаме (после больших огорчений ему это позволяется). Богатырская грудь вздымалась. «Кафедра» (Иванはきちんとして眠っていた。私のパジャマを着て(さんざん嘆き悲しんで、イワンはそれを着ることを許してもらっている)。大きな胸が盛り上がっていた。)

(24)の不定人称文も省略文であり、また動作様態の副詞句の存在からも動作性がフォーカスされている点は上記で述べた事情と同じである。一方、(25)で受動文が選択されている動機には、意志性の排除という事実が関与している。*ему это позволяется* (彼はそれを着ることを許してもらっている)は能動文に変換すると、完了体他動詞文 *я ему это позволила* (私は彼にそれを着ることを許した)となるが、この2つの文では意志性の差、「仕方なく許した」か「自らの意志で許した」というニュアンスの違いが明確に出る。

さて、これまで再帰形受動文が嫌うとされた現実的持続相であるが、今回の分析データでは238例中51例が観察された。280例中71例を観察した不定人称文の場合と比べても頻度的に大差なく、従来、主張されていた再帰形受動文での<–現実的持続相>という差異化原理について、再考が求められる結果となっている。

- (26) — Есть у вас еще вопросы? — спросил председатель.

— Есть. Я хочу спросить у диссертанта, как из формулы пятнадцать на плакате четвергом выводится формула девятнадцать на плакате пятном?

Яковкин подошел к плакатам осторожно, как к зияющей полынье. Нашел указкой формулы, спросил:

— Эта? Эта?

Я подтвердила.

— Как выводятся? Элементарно. С помощью тождественных преобразований. «Кафедра» («まだ質問がありますか?」— 議長が尋ねた。「あります。論文執筆者におたずねしたいのですが、どのように 4 番目のパネルの公式 15 から、5 番目のパネルの公式 19 が導き出されるのでしょうか?」ヤーコフキンは、薄氷を踏むかのようにこわごととパネルに近付いた。「これですか? これでしょうか?」私はどれかを言った。「どのように 導き出されるか、ですか? もっとも簡単なことです。同様の変換を援用したわけです」)

(27) — Но почему, Артем? Второе-то легче будет.

— Но и знать будут трое, не забывай об этом. А так — только ты один.

— И ты. — Игорь пристально посмотрел на Резникова.

— Я не в счет, — ухмыльнулся Артем. — У меня в этой игре ставка самая большая, поэтому я в молчании больше тебя заинтересован. Все, Игорек, больше ничего не обсуждается. ...

«Убийца Поневале» («どうして? 3 人のほうが簡単だ」「そのかわり、事情を知る人間も 3 人になるのを忘れるな。1 人でやれば知っているのは貴様だけだ」「あんたもだ」今度はいーゴリがアルチョムを見つめた。「俺を数に入れるなよ」アルチョムはせせら笑った。「俺はこのゲームの賭け金が一番高い。だから沈黙には、貴様なんかよりはるかに真剣にこだわっている。さあさ、いーゴリ、話し合うことはもうないぜ。...」)

(26) では как (どのように) という成分からもわかるように、公式が導き出されるプロセスについてのやり取りが描かれており、一見、動作性をフォーカスする不定人称文 (22) と機能的に近いもののように感じられる。しかしながら、(26) における再帰形受動文の使用にも、長期継続相のところ考察した「意志性の有無」という指標が深く関与しており、その使用は義務的とも言える。つまり、質問者にはアイロニーを含意させつつ、回答者には事実の主張として、「公式が導き出されるにあたって、研究者の意図は関与していないのだ」ということを受動文によって巧みに表現させているのだ。

それでは (27) における再帰形受動文 больше ничего не обсуждается の使用背景にはどのような動機づけがあるのだろうか。まず、単なる事実としての動作プロセスではないことはすぐに読み取れる。そこには「もう話し合いはすんだ、話し合うべき必要はない」という不必要のモダリティーが明確に表現されている。

必要／不必要、可能／不可能、規範等のモダリティーはフランス語やドイツ語、また英語などの中間構文でも特徴的に観察されるが、ロシア語でも特に次の (28) ような内在的的属性や、(29) のような法令・規定を表現する文でしばしば見られる。

(28) ... Через полгода она, как говорили преподаватели, "прошла уже период полураспада" — у стола дверцы не закрывались, а ящики, наоборот, открывались с трудом. «Кафедра» (半年たつと、これらの家具は、教員たちの言によれば《既に半減期に入った》。机の引き戸は閉じようとしないし、ひきだしの方は逆に、やっこさ開くような始末だ。)

(29) ... И любое, даже малейшее неповиновение кого-либо из идущих с ним на покорение мира будет пресекаться не иначе как смертной карой. «Белое облако» (彼とともに世界制覇におもむく者のうちの誰かがたとえわずかでも不服従を示せば、その人間はただちに死刑によって排除される。)

ロシア語ではモダリティーを表現するこのタイプの再帰構文は、特定動作主の存在を前提としない事物の属性表示や、事物に関する規範等の表現であるという点で、擬似受動用法として本来の受動用法とは区別される。が、ロシア語再帰動詞の中核的意味である「主体内にとどまる動作・変化」という中動的意義からは明らかにメタファー的にシフトしており、中動と受動のファジー領域を形成する用法とも言えるだろう。(27)の再帰構文は、モダリティーを表現するという点で擬似受動と共通するが、経験主体の与格項を伴うことで—(27)ではнам(おれたち=アルチョムとイーゴリ)が省略されている—特定時点での事態を表現する無人称受動文に分類される。今回の分析では擬似受動用法、無人称受動文についても、意味・機能面における不定人称文との相関性を考察するため、対象データに含めている。

さらに、現実的持続相のバリエーションである指令的現在⁶⁾と呼ばれるアスペクト意味においても、次の(30)に見るように、モダリティーを表現する再帰形受動文が使われる。

(30) Предъявителю сего господину Фельдману Якову Григорьевичу разрешается свободный выезд и въезд из Города по делам снабжения броневых частей гарнизона Города, а равно и хождение по Городу после 12 час. ночи. «Белая гвардия» (本証所持者ヤコフ・グリゴリエヴィチ・フェリドマン殿には本市守備隊装甲自動隊への補給業務のための本市よりの自由なる出入り並びに午前零時以降の通行を許可する。)

このようなモダリティーを表現する再帰形受動文(擬似受動文も含めて)は、不定人称文等の能動文にそのまま置き換えた場合、モーダルな性格は失われてしまい、補助動詞等の補足が必要となり、結果的に冗長な表現となることが避けられない。特に法令・規程など簡潔な表現が必要とされる場合など、この意味領域で再帰形受動文使用の強い動機が形成されるのである。238例の分析対象データ全体では24例の、現実的持続相51例の中でも8例の再帰形受動文が、こういったモダリティー表現意図を使用動機としてもつ。

従来、「主語」の習慣的狀態、恒常的属性表現という側面のみがクローズアップされてきた再帰形受動文。しかしながら、現実データにおいて相当数の現実的持続相の用例が観察され、それは再帰形受動文の使用動機を習慣・反復性、現実的持続性といったアスペクト意味のみで説明することの難しさを物語っている。

本稿では同様のアスペクト意味をもつ再帰形受動文、不定人称文について、動作性のフォーカス、意志性指標の有無、モダリティー表現という3つの観点から考察を進めることで、2構文におけるそれら機能面での役割分担、差異化原理を明らかにした。

ただ、2構文は上記の点のみならず、テキスト構造上においても機能的差異を観察できるようである。さらには、今回のデータを観察すると、両構文が見せる上記の3つの機能面でのそれぞれの特性の背景に、それを支えるより根本的な構文特性とでもいべき差異の存在を暗示する傾向が見えてくるようである。次節でそのような事例について簡単に紹介し、今後の課題として考察の方向性を示したい。

5. 今後の課題

(31) — Напротив, замах чисто местного масштаба: я говорю о наших вузовских делах.

Как учитывается наша работа? По среднему баллу, по проценту двоек. Это же курам на смех! Кто как не мы сами ставим себе эти оценки? Давайте сравним с другими областями производства. Где это слышано, чтобы работа завода, фабрики, мастерской оценивалась по отметкам, которые они сами себе выставили? «Кафедра» (「その反対です、わたしの手の拡げ方はまったく地域的規模のものです。私は私たちの大学のことを話しているのです。我々の仕事はどう見られているのでしょうか。平均点と2点のパーセンテージによります。笑止千万です。他ならぬ我々自身が自分に点数をつけているのです。他の生産分野と比較しましょう。工場や作業場の仕事は、自分らの付ける点数によって評価されるなんて、どこかで聞いたことがありますか。」)

(32) — Мы их месяц ждали. — Голос у нее подрагивал, сдерживался, чтобы не забиться, не заплескаться. — У нас пятьдесят рублей долгу. Как мы теперь? «Деньги для Марии» (「あ

たしらは、あれをひと月待ってたんだよ」彼女の声は震えており、跳ね上がって飛び出したりしないように、抑えつけられていた。「あたしんとは、50ルーブル借金があるのに、これからどうやってゆけばいいんだよ?」)

(31)(32)での再帰形受動文選択には、おそらく結束性や一貫性など、テキストレベルにおける問題が関わっているように思える。

例えば、(31)の оценивалась (評価される) を不定人称文で表現するためには、他動詞複数形 оценивали (評価する) が使われることになるが、そうすると後続節における они (彼ら = 工場や作業場の人々) が оценивали の主語であるという解釈が生じてしまい、文意が通らなくなる。また(32)では「主語 голос (声) + 述語 подрагивал (震えていた - 自動詞)」に続く述語の展開において、голос を直接補語とする不定人称文を挿入することはできない。

こうしたテキストレベルでの結束性保持の機能が構文選択に関与する以外に、主題の一貫性という話し手の視点レベルの問題も無視できないであろう。

さらには、これまで述べてきた動作性のフォーカス、意志性指標の有無、モダリティー表現等における両構文の機能的差異の背景に、非限界／限界という述語の動詞語彙の特性がより本質的に関与しているのではないかという可能性も示唆される。すなわち、アスペクト的には同じ現実的持続動作であっても、不定人称文における不完了体他動詞の場合には、限界的動作の途中経過としてのプロセスが描かれるのに対し、再帰形受動文では述語動詞がすでに限界性指標を失っているのではないかという可能性である。この点を考察するにはさらに広範囲なデータ収集と共起制限等をめぐる詳細な分析が必要とされるだろう。

これらの考察については次稿以降の課題としたい。

註

- 1) 以下、本稿では単に不定人称文とし、特に断らない限り不完了体他動詞不定人称文を指すこととする。
- 2) この2構文は、客体主題化、動作主非焦点化等の機能のみならず、アスペクト機能上も重なりを見せると考えられる。
- 3) 厳密に言えば、この段階では中動用法と受動用法の境界領域とされる擬似受動文もデータに含まれている。擬似受動文については4.3で詳しく考察する。
- 4) ロシア語で普遍人称文として分類される文は、構文内に主語名詞句をもたず、主として2人称単数、現在または未来の述語形態を用い、事柄の普遍的な性格規定や、ある状況をどのような人物にも起こり得る普遍的なものとして表現するという意味機能を担う(Современный русский язык 2006:135-139)。
- 5) 研究社露和辞典(1988)の記述に依拠した。
- 6) 「指令的現在」では、動作自体は未来に行われるが、その動作の実現が義務的であるということが示される。金田一(1994:26)、林田(1999:118)参照。

参考文献

- Данков, В.Н. 1981. *Историческая грамматика русского языка: Выражение залоговых отношений у глагола*. М.
- 春木 仁孝. 1993.「代名動詞－受動的用法と中立的用法を中心に」『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社.
- 林田 理恵. 1999.「ロシア語受動構文の意味と機能」『ロシア・東欧研究』第3号.
- 2000.「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について－(3)受動構文」『大阪外国語大学論集』第22号.
- 2001.「ロシア語受動構文と不定人称文」『ロシア・東欧研究』第5号.
- 2005.「第3部ロシア語のヴォイス」『ロシア語のアスペクトとヴォイスーことばの生成と

- 解体の場で—』博士論文（神戸市外国語大学）。
- 2011. 「ロシア語の受け身が描く世界 — 主語と動作主項をめぐって —」『大阪大学世界言語研究センター論集』第6号。
- Храковский, В.С. 1991. Пассивные конструкции // *Теория функциональной грамматики: Персональность. Залоговость*. СПб.
- 研究社露和辞典 1988. 『研究社露和辞典』研究社。
- 金田一 真澄. 1994. 『ロシア語時制論 — 歴史的現在とその周辺』三省堂。
- Крысько, В.Б. 1997. *Исторический синтаксис русского языка: Объект и переходность*. М.
- Кузьмина, И.Б., Немченко, Е.В. 1982. История причастий // *Историческая грамматика русского языка: Морфология. Глагол*. М.
- Ломтев, Т.П. 1956. *Очерк по историческому синтаксису русского языка*. М.
- Скобликова, Е.С. 2006. *Современный русский язык: Синтаксис простого предложения*. М.
- Wagner, R.L. et Pinchon, J. 1962. *Grammaire du français classique et moderne*. Paris, Hachette.
- 山田 博志. 1997. 「中間構文について—フランス語を中心に—」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社。

例文出典

- Айтматов, Ч. *Джамиля*. Киев, 1976. «Джамиля»
- アイトマートフ, Ch. 「ジャミリヤー」『キルギスの青い空』（佐野朝子訳）フォア文庫, 1982.
- Айтматов, Ч. *Белое облако Чингисхана*. Знамя. 1990. № 8. «Белое облако»
- アイトマートフ, Ch. 『チンギス・ハンの白い雲』（飯田平和訳）潮出版社, 1991.
- Булгаков, М. *Белая гвардия*. М., 1989. «Белая гвардия»
- ブルガーコフ, М. 『白衛軍』（中田甫・浅川彰三訳）群像社, 1993.
- Грекова, И. *Кафедра*. <http://lib.ru/> «Кафедра»
- グレーコワ, I. 『大学教師』（前田勇訳）群像社, 1988.
- Маринина, А. *Убийца поневоле*. М., 1998. «Убийца поневоле»
- マリーニナ, А. 『孤独な殺人者』（吉岡ゆき訳）作品社, 2000.
- Окуджава, Б. *Похождения Шипова, или Старинный водевиль*. <http://lib.ru/> «Похождения Шипова»
- オクジャワ, В. 『シーポフの冒険 あるいは今は昔のボードビル』（沼野充義・沼野恭子訳）群像社, 1989.
- Распутин, В. *Деньги для Марии*. М., 1984. «Деньги для Марии»
- ラスプーチン, V. 『マリヤのための金』（安岡治子訳）群像社, 1984.

（行末の《 》内は本文中に記載した出典表示を示す。また邦訳については本文中の日本語訳の参考としているが、誤訳、分析に支障のある意識に関しては適切な内容に随時変更している。）